

## Ⅹ 草地（暖地型牧草）

### 1). 基肥の施用量

(kg/10a)

区 分	目標収量(t/10a)	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	備 考
起 耕 法	10	10~12	10~15	7~10	窒素の過多施用は野草が過繁茂するから注意が必要
不起耕法	10	4~5	10~15	3~6	

### 2). 牧草維持の施肥量

(kg/10a)

項目 施用時期	施 肥 量						備 考
	放牧草地			採草・放牧兼用草地			
	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	
4月上旬	5.0	6.0	3.0	5.0	6.0	3.0	
5月	5.0		3.0	5.0		3.0	
6月中旬	5.0		3.0	5.0		3.0	
7月下旬	5.0	9.0	3.0	5.0		3.0	
9月中旬	—	—	—	5.0	9.0	3.0	
計	20.0	15.0	12.0	25.0	15.0	15.0	

### 3). 草地の造成方法

#### ①耕起法

春播は4月上旬～5月下旬、秋播は8月上旬～8月下旬が適期である。発芽率80%に要する日数は約2週間である。発芽するまでの種子の乾湿は、発芽に与える影響が大きいので、覆土、鎮圧の効果が高い。播種後は種子が土の中に入るように、ツースハロー、または柴ハローをかけローラあるいはカルチバッカーで1～2回鎮圧する。秋播では、耕起法・不耕起法ともコオロギ・ケラなどの食害をうけやすいから、ダイアジノン粒剤または粉剤の3%を10a当り4～5kgを散布すればよい。暖地型牧草は、雑草に抑圧されるおそれがあるから草高20cm位になったとき、採草もしくは軽く放牧して管理する。

#### ②不耕起法

##### イ 火入れ直播

造成予定地は、春播は3月頃、秋播では9月上旬に刈払い、障害物を除去した後に火入れする。火入れでは、火災防止に万全の注意を払い、斜面の上方、あるいは風上から行うと危険も少なく、よく落葉が燃え、種子が地面につきやすい。火入れ後に土壤改良資材を散布し、種子を播種する。その後、草高が20cm位に達したとき採草もしくは放牧して管理することが大切であるが、植生が定着するまでの利用は草高20～30cmを励行する。

##### ロ 殺草直播

春播は3月、秋播は7月下旬に殺草剤(塩素酸ナトリウム12kg/10a)を散布し、約1ヶ月後、土壤改良資材の散布、種子を播種する。その後草高20cm位に達したとき採草、放牧し管理する。

##### ハ 蹄耕法

春播は4～5月、秋播は9月上旬に播種し、すぐに10a当り10頭の割合で2日間程度放牧し、その後は草丈20～30cmに達した時に採草・放牧管理する。

4). 播種量

10a当り5~6kgを播種する。

5). 追播

10月にイタリアライグラス(ワユカ・サラクセ)を10a当り3kg追播すると早春の採草、放牧が可能である。

6). 土壤改良

耕起法では、PH6.0を目標に石灰質資材を散布する。磷酸質資材は、表層土の10cmを対象に磷酸吸収係数の5%相当量を施用して土壤とよく混ぜる。石灰質資材・磷酸質資材の10a当りおよその施用量は苦土石灰150kg、熔りん50kgであるが、正しく土壤診断を行ってきめる。堆きゅう肥は5t/10aを目安とする。不耕起法の場合における土壤改良資材の施用量は、苦土石灰は150kg/10a、また熔りんは100kg/10aを基準とする。